

国立国語研究所学術情報リポジトリ

全国方言調査データから見た感動詞の地域差

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤村, 美幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002692

全国方言調査データから見た感動詞の地域差

澤村 美幸

(和歌山大学)

1. 目的と方法

感動詞や感嘆表現にも地域差があることは、『瀬戸内海言語図巻 下』、『方言文法全国地図 5・6』などの方言地図や、方言研究ゼミナール（2006）の研究などで知られているところである。しかし、こうした地域差を扱う際の問題については、開拓され始めたばかりの分野であるだけに十分な議論が行われているとは言い難い。

本稿ではこのような現状をふまえ、感動詞（感嘆表現も含む）の地域差についていくつかの事例を紹介し、その上で従来の分野とは異なる「地域差」へのアプローチの仕方や、こうした分野を扱う際の問題について考えてみたい。

まず初めに、地図化のもととなった調査の概要や、その結果のデータベース化について概要を述べた上で、調査結果によって作成した方言地図を紹介する。その上で、感動詞や感嘆表現などの地域差を扱う際の特徴や問題点などについて、現段階での考えをまとめてみたい。

2. 調査の概要

まず初めに、東北大学方言研究センター（代表：小林隆）で2009年度に行われた全国感動詞調査の概要について紹介する。

○調査方法：通信法

○調査時期：2009年度1月

○調査地点：全国2000の市町村（市町村合併等の関係により、一部公民館を含む）に配布。

⇒回収率は約50パーセント程度

○インフォーマント：回答者の条件として、こちらが指定したのは以下のとおりである。

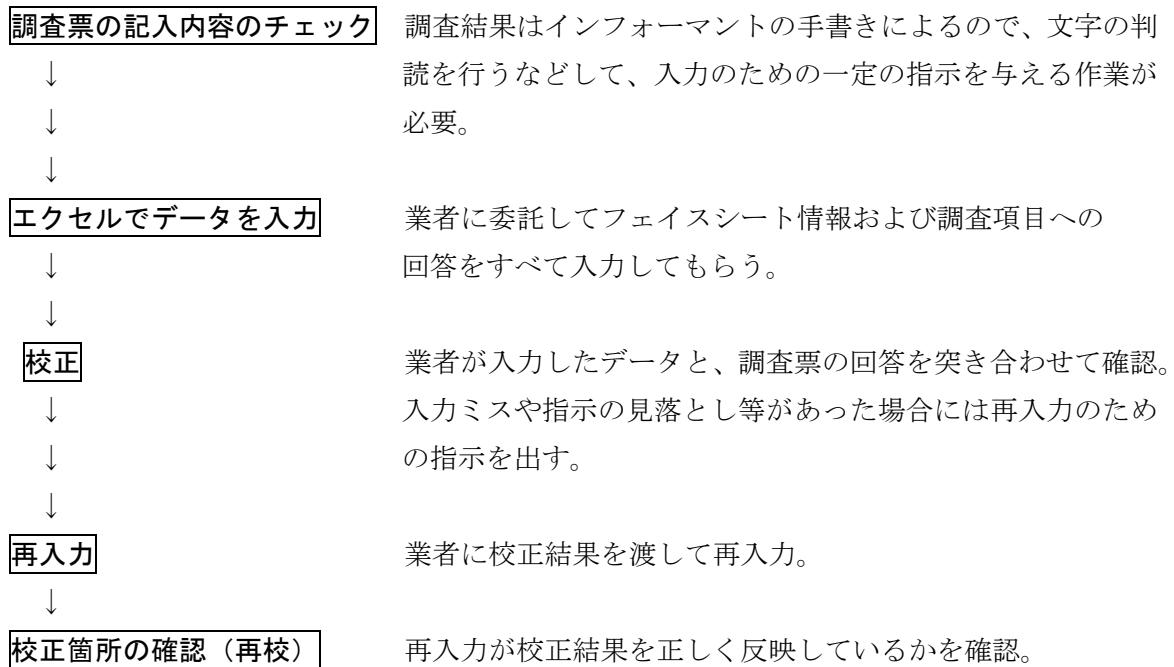
- ・ご当地（同市町村）に生まれ育ち、成人してからもほとんど他市町村に出たことのない方。
- ・男性の方（ご無理な場合は女性の方でもけっこうです）。
- ・60歳以上で、方言をよく残していると思われる方。
- ・質問は簡単な内容ですが、感動詞の調査ですので、驚いた場面や喜んだ場面など、その場にいるようなつもりで回答していただく必要があります。その点では、なるべく勘のよい方にお願いできれば幸いです。

○調査項目数：第1調査票59項目、第2調査票55項目。

3. 調査結果のデータベース化

2の調査の結果を分析・地図化するため、結果はすべて電子的にデータベース化を行った。

調査票の回収からデータベース作成までの流れは以下の通りである。



4. 「暑さ」・「熱さ」・「辛さ」・「汚さ」に見る感動詞の地域差

今回は新たに、東北大学方言研究センター（代表：小林隆）で2009年度に行われた全国感動詞調査の結果をもとに、感嘆表現の地域差とその方言形成について検討していく。ここでは、感動詞および感嘆表現について尋ねた第1調査票から、知覚・判断に関わる4つの項目の調査結果を利用する。なお、これらの調査方法と分析結果については既に澤村（2012）で詳しく述べているので、ここでは繰り返さない。

この調査によって、集まった調査票907件のうち、回答者が「生え抜き」の条件を満たすもの825件を対象とし、方言分布図を作成したのが次ページ以降の図1～図12である（注）。なお沖縄における分布は、今回の論点には深く関わらないもののが多かったため割愛した。

4. 1. 語幹（●）と終止形（／）

まず、4つの項目について、形容詞の語幹による感嘆用法が回答された地点（●）と、終止形で感嘆を表現する地点（／）によって地域差が見られた。図1「暑い（アツ-アツイ）」、図2「熱い（アツ-アツイ）」、図3「辛い（カラ-カライ）」、図4「汚い（キタナ-キタナイ）」である。

なお、分類に際しては、「アツッ」と「アツー」など、語形の細かな違いは全て捨象して統一した。また、九州に見られるカ語尾の形も終止形という点では等価であると見なし、終止形のグループにまとめて分類した。

これら4つの地図から、形容詞語幹の感嘆用法の形式は近畿地方を中心とした西日本に多く見られることが明らかである。しかし、よく分布を見ていくと九州では、それほど顕著な形容詞語幹の感嘆用法の分布は見られない。また、図4を除く図1～図3は、東北地方にも比較的まとま

った分布が見られることも特徴的である。

4. 2. 感動詞の前接（●）と前接なし（／）

今回の回答では、「アツ」や「アツイ」といった感動詞のみの回答が多く見られたものの、一方で「ウワー+アツイ」など、感動詞が形容詞に前接するか否かという点に関して、項目ごとに違いが見られた。この点に着目し、感動詞が前接するもの（●）としないもの（／）とに分けて地図化したのが図5～図8である。これらの地図でまず目に付くのは、図6「熱い」ではないだろうか。図6は、形態的に同じ図5「暑い」と同じような分布を描いてもよさそうなものだが、図5については「ワー+アツイ」などの感動詞が前接する形態が一定数見られたのに対し、図6では感動詞が前接しない形式が圧倒的であった。また、図7「辛い」や図8「汚い」は感動詞が比較的前接しやすい傾向が見て取れる。

4. 3. 「その他（●）」

ここまででは「アツイ」「カライ」「キタナイ」などの形容詞に由来する感動詞を中心に見てきたが、感動詞のみなど形容詞に由来しない形式は「その他」に分類した。この「その他」のみの分布を示したのが図9～図12である。

これらの中で最初に目につくのは図10「熱い」であろう。他の地図に比べると、極端に分布が少ない。一方、分布が最も多いのは図12「汚い」であり、この2枚の地図にはかなりの違いが見て取れる。具体的に数字にしてみると、「その他」に分類した回答は、図9で277件、図10で69件、図11で366件、図12で531件あった。すなわち、感動詞に由来しない形式の回答という点において、項目ごとにかなりの相違が見られることは明らかである。

5. 感動詞の地域差をどう捉えるか

4. 1から4. 3では全国感動詞調査の結果について、3つの観点から見た場合にさまざまな地域差や、項目ごとの偏りがあることを述べた。

それぞれの分布の解釈や、分布形成の経緯についても検討しておきたいところだが、ここでは感動詞を対象として地域差を捉える際の別の問題について論じたい。

少し穿った見方をすれば、ここまで見てきた感動詞の地域差は、こちらが様々な「切り口」を用意したことによって見えてきた地域差であり、実際の調査結果はもっと煩雑なものであることが多い。裏を返せば、そうした切り口なしでは地域差と言えるようなものは浮かび上がってこないのである。とりわけ感動詞の場合は、語彙の方言地図を作成する時のように、単語を記号に置き換えるだけの作業だけでは地域差が見えてこないので実状である。

この問題を考えるために、以下に澤村（2011）から、感動詞の地域差についての事例を二つ紹介してみる。調査の詳細については、ここで詳しく述べることはできないため、小林・篠崎（2003）をご覧いただきたい。

5. 1. 失敗の感動詞の地域差

まず、失敗に際してどのような声を上げるかについての方言分布(図13)をご覧いただきたい。

- ①シマッタ類(シマッタ／シモータ／シモタ／チョッシモタ／アイタシモタ)：共通語的な言い方である「シマッタ」と、その変種である「シモータ」「シモタ」は、いわゆる東西境界線を境目とし、その東側と西側とに分かれて分布している。ただし、「シマッタ」は関東よりもむしろ岐阜・愛知などの中部地方を中心とした分布を見せており。それに対して「シモータ」「シモタ」は西日本の広範囲を覆っており、強い勢力を持った語であることがわかる。また、「チョッシモタ」が鹿児島に、「アイタシモタ」が九州各地に散在している。
- ②アイター類(アイター／アター)：「アイター」は、東北や関東にも見られるものの、その分布は近畿以西に多く、九州での回答も目立っている。また、「アター」は、東北・関東に点在するほか、西日本でも数地点の分布が見られる。これらはいずれも「アイター」の周辺に分布していることから、「アター」は「アイター」の転訛形であると思われる。
- ③ヤッター：関東地方を中心とした分布を見せるが、中国地方や九州北部にも数地点分布が見られる。
- ④シクジッタ類(シクジッタ／シクッタ)：「シクジッタ」、またその転訛形と思われる「シクッタ」は、特に岩手県北部に集中した領域を持ち、その分布は青森・秋田・宮城の県境にまで及んでいる。
- ⑤マイッタ：群馬・栃木・茨城といった関東地方中心に分布するほか、全国に数地点散在する。
- ⑥ヨワッタ：近畿地方に分布しており、特に和歌山県における分布が顕著である。
- ⑦チクショー：関東・東海地方を中心とした分布を見せるが、全国にも散在的に分布する。
- ⑧サーサ類(サーサ／アッサーサ／サイ)：「サーサ」と「アッサーサ」は、長野・新潟から東北にかけて分布しており、特に日本海側の分布が顕著である。「サイ」は、青森・岩手・秋田にそれぞれ数地点の分布が見られる。
- ⑨アチャー類(アチャー／アリヤー／アヤー)：「アチャー」「アリヤー」はいずれも全国的な広がりをもって分布しているが、近畿・四国九州における分布は少なく、概して西日本よりも東日本における勢力が強いようである。また、「アヤー」は東北地方中心の分布を見せており、沖縄を除き、西日本には分布が見られない。
- ⑩ヤイヤイ類(ヤイヤイ／ヤイヤ)：「ヤイヤイ」の分布は、静岡県西部に特に顕著である。「ヤイヤ」は長崎・鹿児島などに見られるほか、福島にも2地点分布している。
- ⑪バッサリ：高知に3地点のみであり、極めて局所的である。
- ⑫アキサミヨー：沖縄本島と多良間島にそれぞれ1地点ずつ見られる。
- ⑬ダー：山形・福島に各1地点のみの分布である。
- ⑭チエツ：東京・静岡・長野・岐阜にそれぞれ1～2地点、島根と広島の県境に1地点の分布が見られる。

以上のように、回答された形式はきわめて多様で、全国的な広がりをもつものは少なく、全体として「だから失敗の感動詞にはこういう地域差がある」とひとくくりにまとめることが難しい。それを以下のような切り口で整理したときに初めて東西差という大きな地域差が立ち上がってくる。

概念系感動詞 動詞・形容詞・名詞など概念的なことばに由来するもの

「①シマッタ」類～「⑦チクショウ」

⇒西日本に顕著

非概念系感動詞 指示語やオノマトペ、あるいは生理的な音声など非概念的な要素に由来するもの

「⑧サーサ類」～「⑯チエツ」

⇒東日本に顕著

5. 2. 痛みの感動詞の地域差

次に、痛みを感じた時にどのような声を上げるかについての地域差（図14）について取り上げる。ごく簡単にまとめると、痛みの感動詞についての分布は、以下のような東西対立として捉えることができる。

西日本中心の分布：「イタ」・「アナイタ」・「アイタ」

東日本中心の分布：「イタイ」・「アナイタイ」・「アイタイ」

⇒形容詞語幹の感嘆用法、およびそれに由来する形式が西日本に、形容詞の終止形によるものが東日本に多く分布するという点では比較的シンプルな東西対立を描く。

「失敗の感動詞」に比べると「痛みの感動詞」の分布は、形容詞語幹の感嘆用法か終止形かという点で2つのグループに分かれるためにシンプルなものだが、いずれにしても形式そのものではなく、一段階上のレベルでグループ化した時に東西差が見えてくる点については他と変わらないとも言える。

以上のように、「切り口」を工夫しないと見えてこない地域差というのはいったい何なのだろうか。感動詞の地域差を扱っていると、このような問題に常にぶつからざるを得ない。その理由の一つには、感動詞調査における回答の多様さが指摘できる。「痛みの感動詞」や、先に見た「暑い」「熱い」「辛い」「汚い」などは形容詞レベルでは共通した回答が見られる点でむしろ特殊な事例であり、実際には「失敗の感動詞」のように、きわめて回答のバリエーションが豊富なものの方が多い。これは感動詞が〈机〉を「ツクエ」と呼ぶような語レベルの問題とは異なり、表現法のレベルに属するものであることや、そのために話者の感動詞に対する規範意識が希薄であるなどの特徴によって生じてきている問題なのかもしれない。あるいは、今回の調査法のために生じた問題である可能性もあり、考えるべき点は多い。

また、感動詞の問題に限ったことではないが、全国的な地域差を捉える上では、その「切り口」をどうやって見つけ出すかということも大きな問題となる。これまで筆者自身はデータを整理する過程で、「こういう観点でグループ化してみれば地域差が出るのではないか」という思考錯誤の末にいわば「地域差を発見する」のが常であった。しかし、こうした方法はともすれば主観的な分析に陥ってしまいがちであり、他にも分析の観点があつた可能性などを否定することは難しい。例えば多変量解析などを用いて、どのような観点で見た場合に地域差が現れたり現れなかつたりするのかということを計量的に分析してみるという方法もある。いずれにせよ、大規模なデータ

によって地域差を扱う場合には、分析方法をより客觀化することで、地域差の「切り口」が必然的なものであることを明らかにしていくべきであると思われる。

さらに、調査結果では感動詞としての回答ではなく、感嘆文として答えられたものも多く、それらを地図化にあたってどのように整理するのかということも今後の課題となる。

いずれにしても、感動詞の研究は始まったばかりであり、その地域差について検討していく際には、まだまだデータが必要である。さらに、調査だけでなく、それを実施する際の調査法そのものについても、船木（2009）などにより提示されているものの、まだまだ精査が必要となってくるであろう。

注 作図には、国立国語研究所の地図とプラグインを使用した。また、地図化にあたっては、竹田晃子氏（国立国語研究所非常勤研究員）、川口良介（和歌山大学大学院生）、藤岡沙季・堀祐輔（和歌山大学学生）の協力を得た。

文献

- 小林隆・篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学硏究費報告書
澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』岩波書店
澤村美幸（2012）「感嘆表現の地域差と方言形成」日本語学会シンポジウム「方言形成論の展開」
日本語学会 2012 年度秋季大会予稿集
船木礼子（2009）「感動詞—詠嘆表現 2」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック』3，私家版
方言研究ゼミナール（2006）『日本語立ち上げ詞の研究』方言資料叢刊 9，私家版

図1 暑い

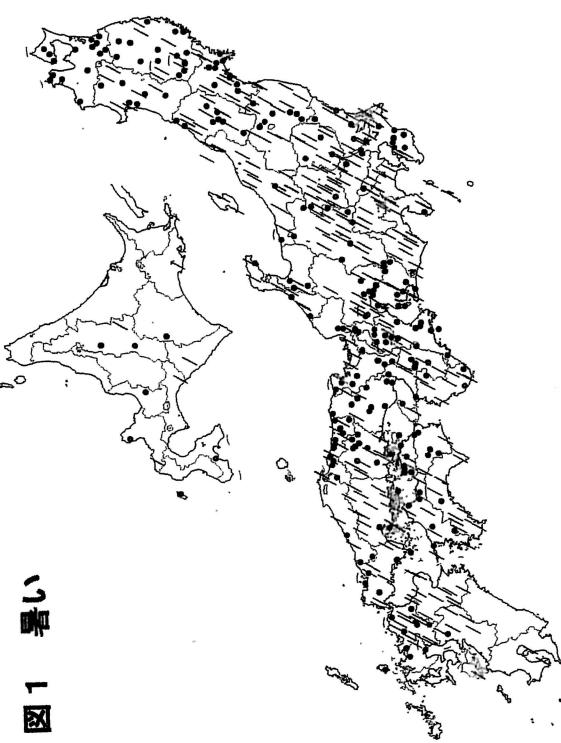


図3 辛い

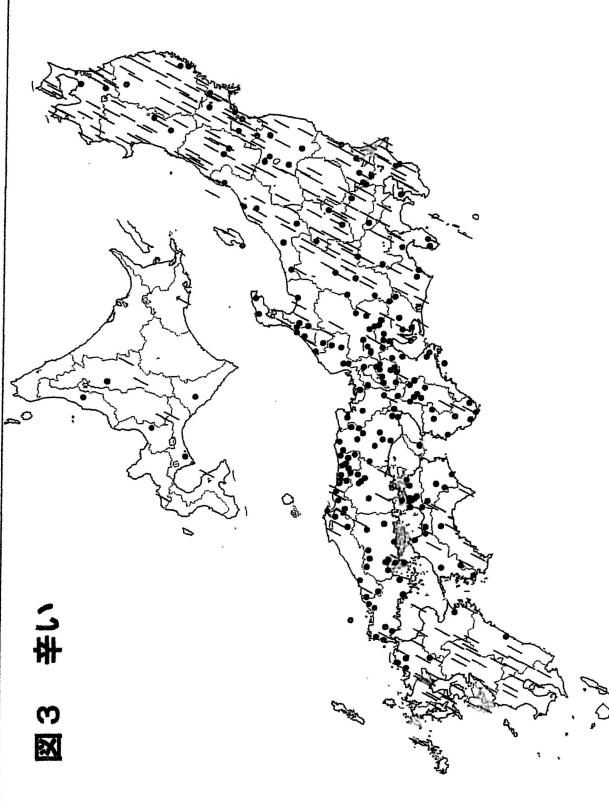


図2 熱い



図4 汚い

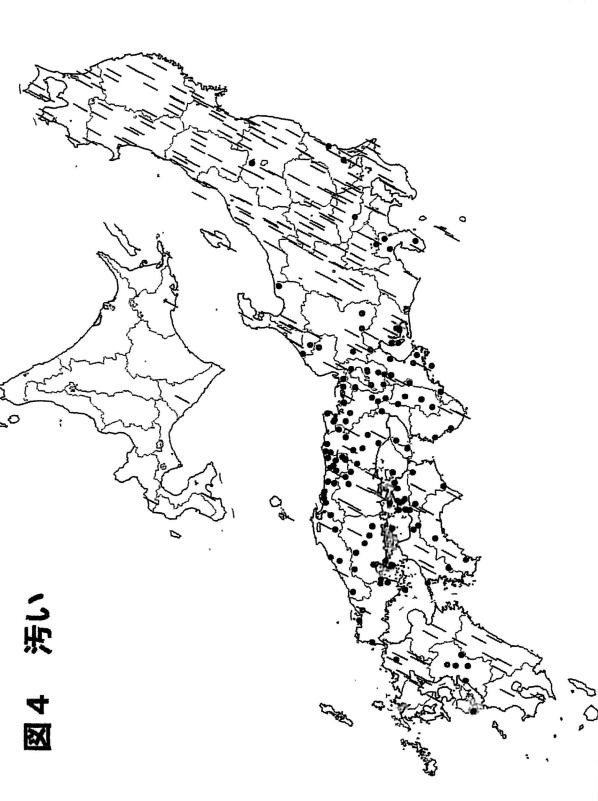


図5 暑い
図7 辛い

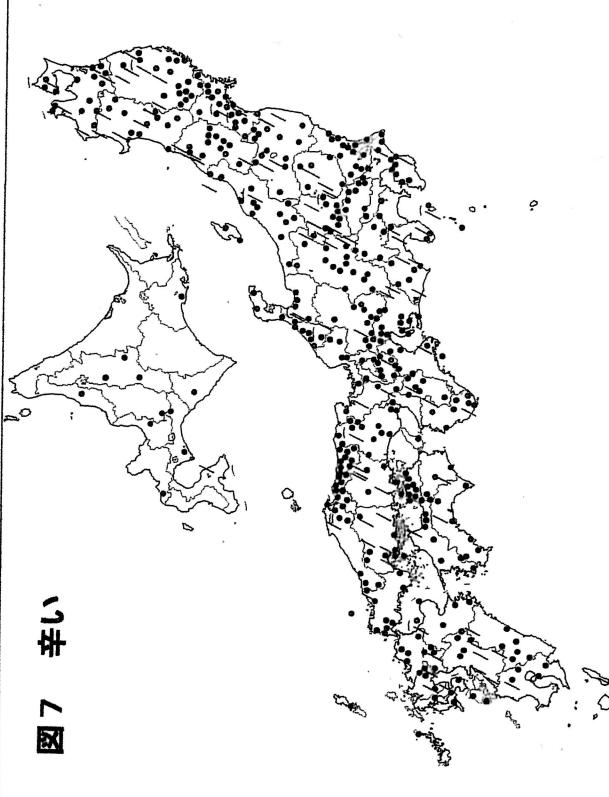
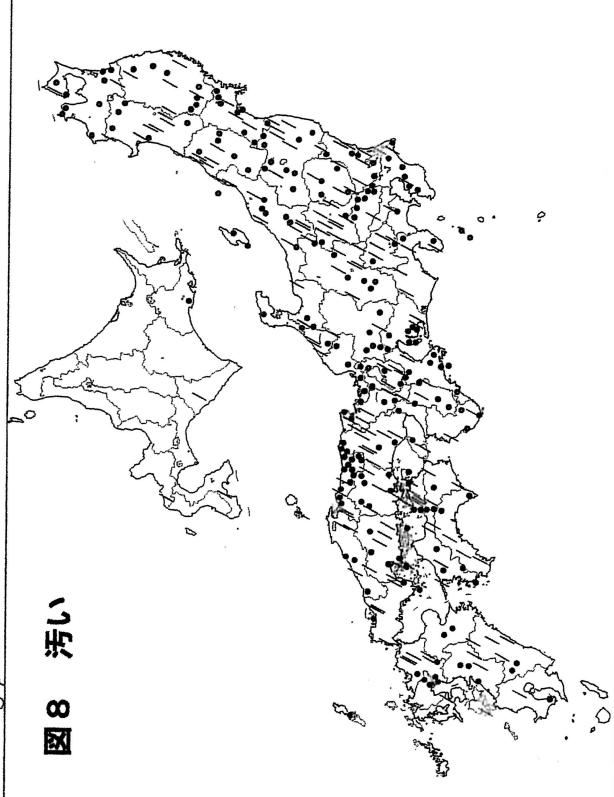


図6 熱い



図8 汚い



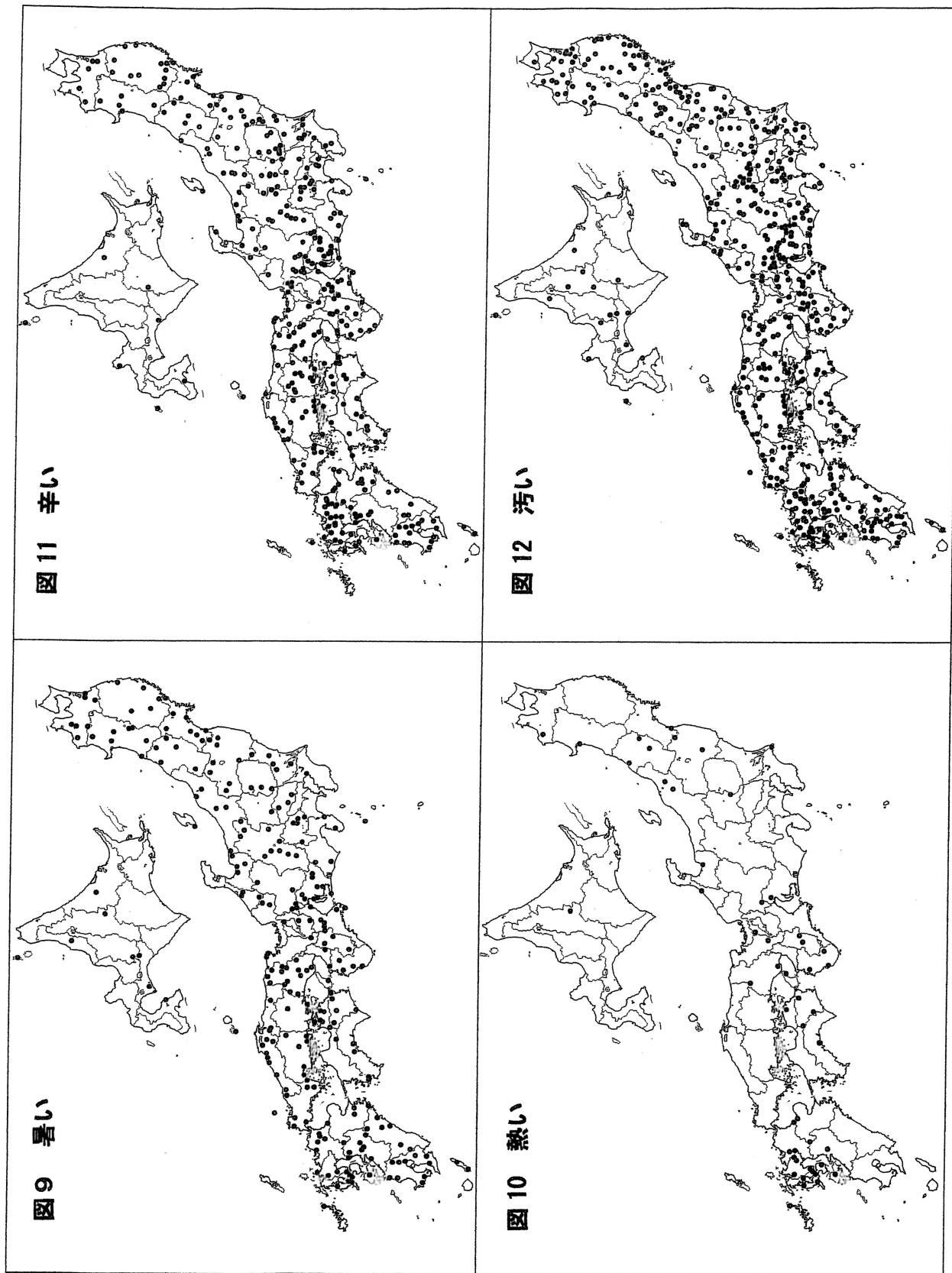
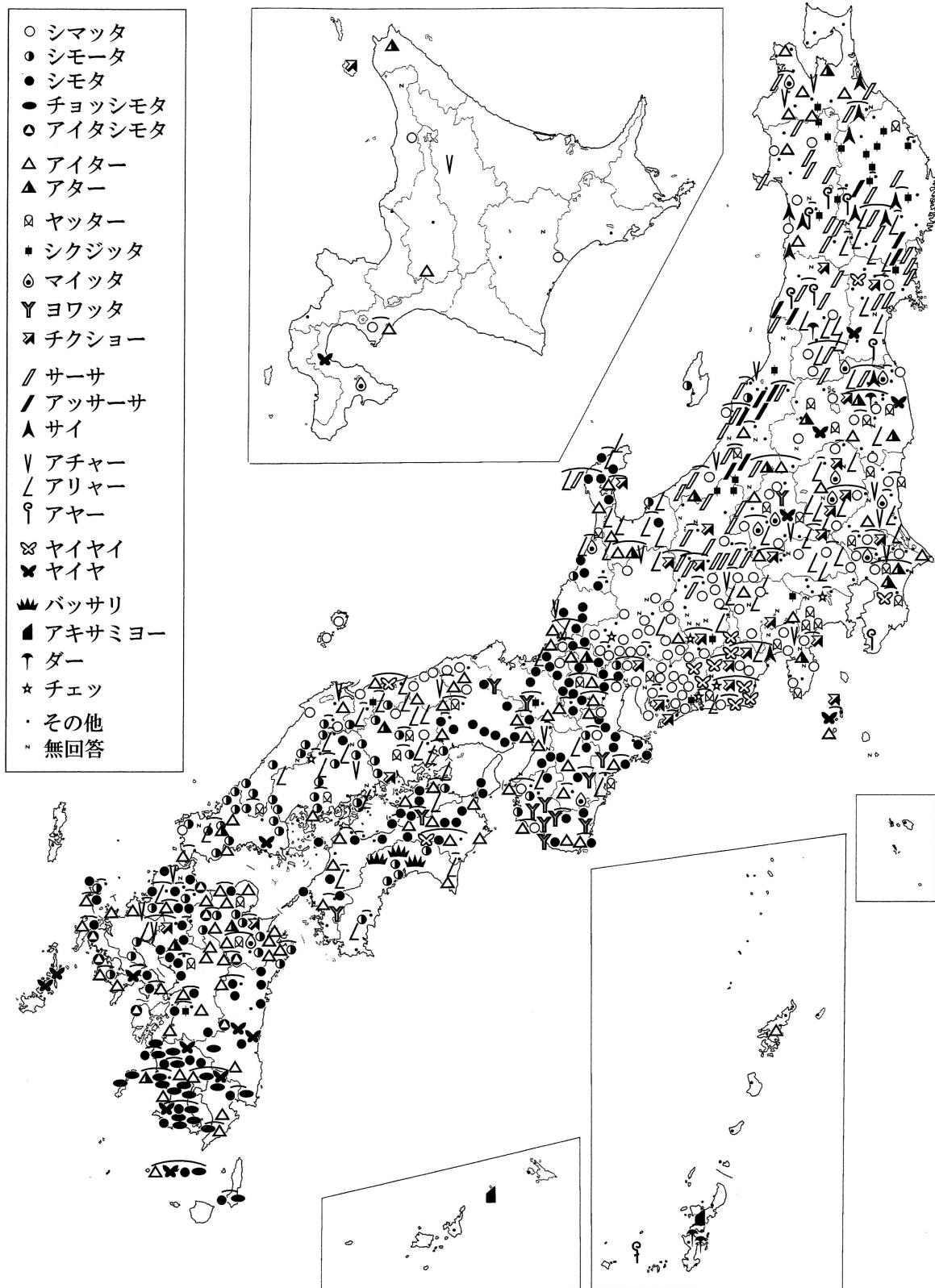


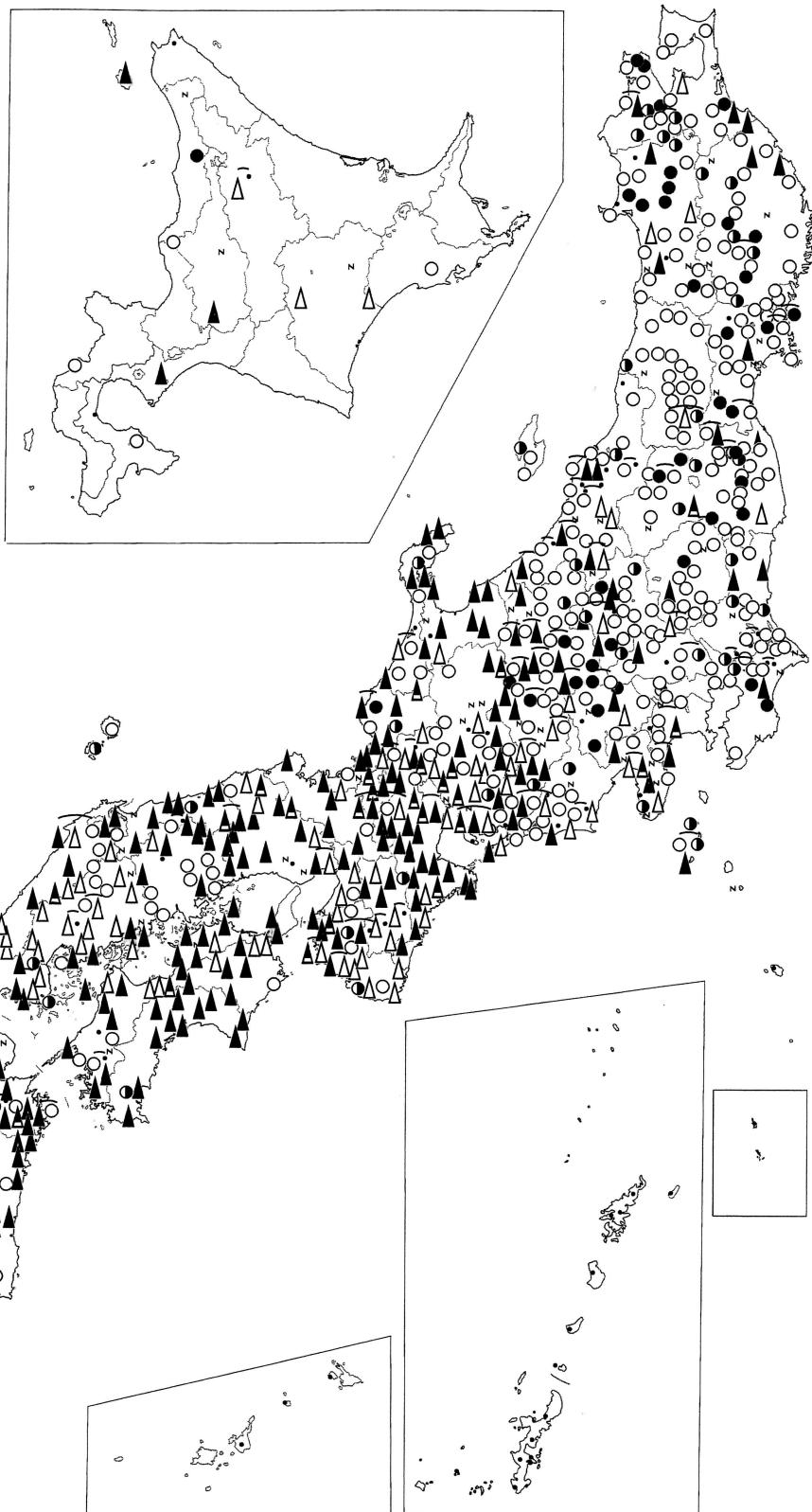
図 13 失敗の感動詞の方言分布



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2003年度調査結果より地図化

図 14 痛みの感動詞の方言分布

- イタイ
- ア+イタイ
- アイタイ
- △ イタ
- ▲ ア+イタ
- ▲ アイタ
- ・ その他
- 無回答



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2003年度調査結果より地図化